人権コラム６月号

【子どもたちから人権を学ぶ】

齋藤　直子（大阪教育大学）

この人権コラムは、大阪教育大学の教員４名が順番に執筆していますが、この号から、私、齋藤直子も加わらせていただきます。私の専門は、家族社会学、部落問題論、質的調査法です。ですので、人権の話の中でも特に、家族とか結婚にまつわる話が多くなるかと思います。どうぞよろしくお願いします。

大学院生の時代から大学の非常勤講師として働いていて、そこから数えて 20 年近く大学で教えています。今回は、そこから私の感じていることをお話ししてみたいと思います。それは、学生たちの人権感覚はどんどんアップデートしている、ということです。

例えば、ある時期から、小学校などで障害者施設に訪問に行ったり、介助体験や車椅子体験などをすることが広まりました。この時代に小学校時代を過ごした若者は、自分の暮らす街には障害者がともに暮らしていることを実感していたり、障害者差別は許せないという感覚をよりいっそう強く持っていたりします。

最近では、学校だけでなく、子ども向けの本や各種のメディアや SNS、友人関係などを通じて SOGIE（ソジーと読みます。性的指向と性自認、ジェンダー表現の英語の頭文字をつなげたものです）について、子どもたちは早い時期からたくさんの知識をつけています。身近に、トランスジェンダーであることを周囲に話している友人がいたり、同性同士で交際しているカップルがいたりするのが、一定程度、当たり前になりつつあります。ほんの十数年前まで、大学生のレポートでは、同性婚に抵抗があるといったコメントがかなり多かったのですが、今ではすっかり逆転しました。教育の大切さをひしひしと感じます。

一般的には、年長の者が幼い子どもにものごとを教えることが多いと思います。ですが、人権問題は時事問題なので、どんどん情報が更新されていきます。ですから、学校などで最新の知見を学んでいる小学生のほうが、大人よりも人権問題の最新情報をよく知っているということが起こります。大人は、昔習ったまま情報がアップデートされず、また当時の常識を現代の常識と考える傾向があると思います。ですから、人権に関してはむしろ大人が小学生に教わることも必要ではないかと思います。私自身、子どもたちや大学生の人権感覚に触れるたびに、「ああ、時代は変わったな」と、毎年のように新鮮な気持ちになります。もちろん、ネットの影響などもあって、変わらないところ、ゆり戻しがあることもありますが、それでも人々の人権感覚は少しずつアップデートを続けていると信じています。